

一日一善

北海道大学医師会
小樽市立病院

青山 聖美

小学生の頃、黒柳徹子さんがアフリカの難民キャンプを訪れたドキュメントを観たのが医師を目指したきっかけでした。栄養失調で瞳ばかりが目立ち、それでも笑顔でいる子供たちの姿に、私も誰かの助けになりたいと思った記憶があります。数年前、先輩の先生が歓迎会の挨拶の中で「一日一善」について触れられた時、はっとしました。医師となって19年が経ち、いつのまにか意識から遠ざかっていたようです。それ以来、初心が薄らいでいることを反省し、その言葉を改めて意識するようになりました。

私は2015年から小樽市立病院に勤務しています。札幌市内の自宅から南小樽駅まで、地下鉄とJRを乗り継いで約1時間30分の通勤は、5年経っても慣れたとは言えませんが、良いこともあります。特にJRでは、車窓から北海道の四季を存分に楽しめます。市街地から次第に離れ、銭函を過ぎると車窓一面に日本海が広がります。カーブで車体が左右にゆっくり揺れるとこんもりとした水平線も見え隠れ。季節ごとに変わる空、海、山の色。朝里を抜けると見え始める海沿いの小樽市街の景色も素敵です。この45分間は、考えをまとめたり、読書したり、時に（多くは）居眠りするのになかなかよく、有意義な時間なのです。

秋のある朝の通勤で、札幌駅から運よく座席に座れたのですが、発車して間もなくクロスシートの後ろでカタカタと音がしたので振り返ると、70代くらいのハットをかぶった背広の男性が杖を持って通路に立っていました。少し不自由そうにお見受けしたので、「すぐ降りますのでどうぞ」と席を空けました。小樽行きの列車は、途中からはたいい座席が空くので大きなことではありません。その日も途中から座席についていつものように過ごし、南小樽駅で下車しようとして出口にいと、先程の男性も杖をつき出口に向かって歩いてきます。ここで降りるのかと、帽子を脱ぎ「こんなに遠くまで来られるのにありがとうございました。本当に助かりました。これからのご多幸をお祈りいたします」と、はるか年下の私に深々と頭を下げられたのです。私がびっくりして「いえいえ」とただ恐縮していると、その男性は杖をつき、でも姿勢よく、座席へ戻っていかれました。その方の言葉は日ごとにじんわりと心に染み入り、この短い出来事からその男性がどれほど真摯で誠実な人生を送られてきたことかと十分に想像されました。果たして自分はどうか？

その後始めたのが、保護猫、保護犬に関わるボランティア活動のお手伝いでした。私自身、保護した猫を家族に迎えたこともありましたが、現在も家族に犬がいることもあって、日本の犬や猫の殺処分問題には胸が締め付けられる思いで、常々私にも何かできないものかと思っていました。活動の内容は、保健所や世話のできなくなった飼い主、ペットショップや多頭飼育崩壊の現場などから犬や猫を保護し、必要な治療や人慣れの訓練、里親への譲渡までのお世話、普及活動などです。ただ可哀そうと思うだけではなく実際に活動している人たちは、その努力の積み重ねと知識の深さ、行動力にいつも感心するばかりです。背景や職種が違って、それぞれ自分の意志で集まるその現場は、共通する意識を持つ者同志初対面でもすぐに打ち解け、温かい気持ちと熱意でいっぱいです。そしてそこで医師としてではなく奮闘している自分はとても新鮮で、でも懐かしくも感じるのです。

一日一善の「善」には、人のために善いことだけではなく、自分のために善いこと、我慢や努力なども含まれるそうです。先輩の言葉をきっかけに、朝のJRでの出来事は、医師20年目となる2020年を迎えるにあたり、自らを振り返り襟を正す良い機会となりました。

